

● 選評

小島なお

・藤ほたる（神奈川県）

月が透けてる。

殻を破れずしんでった

いきものたちで

いっぱいだった

月は空の太古の卵。この世に生まれたことと、生まれなかったことを何が隔てるのだろう。月から眺めれば私たちは地球に今しんでゆくいきものたちだ。

・細村星一郎（東京都）

変な街

変な車に

変な雪

世界に変じゃないものなんてあるのだろうか。変な街に住み、変な車に乗って、変な雪に抒情する。変は愛のはじまるところ。

・豊富瑞歩（茨城県）

マジ全部売り切れてるって

自販機でまたおもしろい

七人の散歩

七人のこびと。七人の侍。七人が集まるとなにかが動き出す。売り切れの自販機でさえ七人の夜を盛り上げる舞台装置になる。永遠につづく七人の散歩。

・鎌倉まくら（宮城県）

死に夏は含まれますか大都会

「バナナはおやつに入りますか」と質問するときと、同じ地点から投げられる問い。死も夏も遠い大都会のなかにあっても、当然、答えは是だろう。

・青木雅（埼玉県）

そういうリアリズムの家かな

理想化を避け現実という現象に価値を置くのが「リアリズム」。強烈なリアリズムの具現化がひとつひとつの「家」と言ってもいい。ちなみに『リアリズムの宿』はつげ義春の漫画。

・うずたろう（埼玉県）

タクシーの

深夜料金の額から

プルメリアの散る

九月の道路

プルメリアの甘やかな香りは神聖とされたり、国によっては幽霊を連想させるという。晩夏を走った深夜料金にこぼれる花はどちらのイメージだろう。

・立花ぼとん（東京都）

目の前のくつしたを雲が

超えるまで

肉体をキャンセルしていたい

ベランダに揺れる靴下とその遠景の雲。雲が渡ってゆくしばしの間、私は私から逃れて無心、無身となれる。肉体は私に不随する契約なのかもしれない。

・大橋弘典（群馬県）

金魚よろめく

大学教授の

脱走

金魚も、大学教授も、今ここから逃れたい願望はみな同じ。日常の天秤のかすかな不均衡によって、金魚はよろめき、大学教授は脱走する。

・広田土（大阪府）

烏龍茶の「うー」が

鳥では無いと知った日

僕はユニクロで

喪服を買った

「うー」は「鳥」ではなく「烏」。「烏龍茶」になった日から、「烏龍茶」のなか

にいた鳥はどこかへ行ってしまった。戻らない言葉を吊うための喪服。

・藤色（京都府）

このマンションで

一番みどりのドアに入る

画一的なマンションのドアのなかで「一番みどりのドア」は非常口ではないだろ

うか。そのドアの先にはたして誰が迎えてくれるのか。